



ジャン・レー『マルペルチュイ』論：〈語り手〉の 多層性と幻想性

岩本，和子

(Citation)

近代, 123:59*-78*

(Issue Date)

2021-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012979>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012979>



ジャン・レー『マルペルチュイ』論 —〈語り手〉の多層性と幻想性—

岩 本 和 子

はじめに

ベルギー幻想文学の中心的作家の一人ジャン・レー（Jean Ray, 本名 Raymond Jean Marie De Kremer, 1887-1964）の代表的な長篇小説『マルペルチュイ *Malpertuis*』（1943）について、別稿¹において、19世紀末に〈マルペルチュイ〉館に住み着いた人々の中に閉じ込められた古代ギリシャの神々の属性との照応関係を中心に論じた。そして、古代ギリシャ、中世キリスト教社会、19～20世紀半ばのフラーンデレンの一都市、といった時空間の多層性とそれらの併存、またテキスト自体の多層性やその意味を考察した。

本稿は、それに続いての『マルペルチュイ』に関する論考となるが、複数存在する〈語り手〉たちのアイデンティティについて、特に宗教に対する姿勢を中心に考えてみたい。フラーンデレンにおけるカトリック信仰と、それに対する異教的、異端的なものとの競合あるいは共存が〈語り手〉たちの、ひいては作家ジャン・レー自身の多層性、そして「ベルギー性」の在り方を解明する一側面となるのではないか。

Ⅰ 複数の〈語り手〉

『マルペルチュイ』の物語は、複数の手記をもとにして、かつて起こった不思議な出来事を解明しそれを報告するという形式をとっている。したがって、いわゆる〈語り手〉は複数存在し、出来事はそれぞれの〈語り手〉のただ一つの視点＝焦点化によって限定的に語られる。次々と沸き起こる謎は少しずつ解

明されるか、あるいは解明されないまま永遠に葬り去られる。テキストは一見探偵小説のようでもありながら、結局は典型的な〈ベルギー幻想派〉の作品として、曖昧で不安を掻き立てる不可思議な世界を描き出しているとも言える。複数の〈語り手〉たちは、マルベルチュイを巡って知りえたことを多層的に呈示する。そこには確固たる中心はなく、最終的に一つの目的＝謎の解明にたどり着くこともない。この前提に立って、まずは〈語り手〉がどのような者たちなのかを挙げておこう。

主語が基本的に一人称となるのは当然だが、フランス語ではすべて《je》という同じ単語になる。それを日本語にする場合、年齢や社会的立場などによって訳し分けることになる。以下、5人の〈語り手〉について、拙訳で試みたそれぞれの主語と、生きた時代、簡単な紹介を挙げておく²。

- 1) 「わたし」＝古ドゥースダム神父 Doucedame-le-Vieil : 19世紀初め
3人称／1人称で、神々の捕囚について書き残す。
- 2) 「ぼく」＝ジャン＝ジャック・グランシール Jean-Jacques Grandsire :
19世紀終わりのころ テキストの大部分を占めることになる手記を日記風に書き残す。物語の中心人物。
- 3) 「わたし」＝新ドゥースダム神父 Doucedame-le-Jeune : 19世紀終わりのころ ジャン＝ジャックを保護し、祖父の罪を負い、死に際に告白する。
- 4) 「私」＝ウシェール神父（ミスロン師）Père Euchère (Dom Misseron) : 19世紀末 パール・ブラン修道院長。3) の新ドゥースダム神父の告白を聞き取り、ジャン＝ジャックの死に立ち会い、アイゼンゴットの告白を聞き、覚書を残す。
- 5) 「おれ」je : 20世紀半ば 第一の語り手。泥棒、教養あり。パール・ブラン修道院から手記を盗み、まとめる。自分でもマルベルチュイ館を

訪れてみる。

5種の手記の並び順も長さもばらばらだが、「現在」に生きる「おれ」が、まず序文の形で古い手記を手に入れた経緯と「執筆者紹介」を行う。全編を通して具体的な場所も年代も明記はされず、それが現実／非現実の境を曖昧にする一因になっている。ただ手記のうち最後のものに一か所だけ日付が記されていて、そのことを「おれ」は次のように報告している。

もう一つ小さな手帳があり、丁寧な字でびっしりと書き込まれていて、金属ケースに収まっていた。これで執筆者が4人となる。

それはミスロン師、すなわち故パール・ブラン修道院長が書いたものだ。この修道院を襲ってうまくいったおかげでおれは錫の筒を発見できたのだ。手帳の最後のページに日付が記してある。急速に過ぎ去る時間の中で、頑として動かぬ印として。1898年9月26日！

5番目で最後の者として、おれも執筆者に名を連ねないといけない。この執筆者たちは互いにまったくかほとんど知り合うことなく、人々の恐怖の歴史の中にマルベルチュイの名も刻んだのだ。(p.16)³

テキストの大部分を占め、物語の中心を成すジャン＝ジャック・グランシールの手記は、マルベルチュイからついに逃げ出しウシェール神父の修道院に向かう途中に、死の恐怖におびえながら三日三晩で走り書きしたものだということが後で明かされる。初めは日記の類と思われたこの手記が、実はかなり間をおいて書かれたもので、複数の時間——「書いている時間」と語られる「数か月前からのマルベルチュイでの時間」が、〈語り手〉の思考の中に同時に存在することが読み取れるであろう。記憶をたどりつつ書いていることから時間が前後することもしばしばあって、テキストの時間構造を複雑にする。手記のご

く初めの方でマルペルチュイの名が最初に出てくる箇所は、そのような「書いている時間」のジャン＝ジャックの精神状態を反映したものだと思われる。

マルペルチュイ！ 重いインクの一滴から、ほくのおびえるペン先から、はじめてこの名前が流れ出る。何より恐ろしい意志によって、人々の幾多の運命の終着点と定められたこの館、その姿を思い出すのは今でもごめんだ。ほくはたじろぐ、躊躇する。記憶の中からその光景を蘇らせるのは。
(p.35)

手記を整理しおそらく自らの手で転写した、つまりすべての手記を支える〈語り手〉としての「おれ」は、冒頭と最終部以外にも時々顔を出す。そしてこの物語が今は亡き人々によって書き残されたものであり、それらを蘇らせたのが自分だということを読者に想起させる。例えば中ほどでジャン＝ジャックの手記をいったん中断させて、冒頭とおなじ古ドゥースダム神父による神々の捕囚の旅の記録を差し込み、館の住人たちに纏わりつく「謎」を部分的に解明した後で、次のような介入すなわち読者への直接の語り掛けを行っている。

かわいそうなドゥースダム神父。自分の先祖が書いたこの黄ばんだ文書が彼の手に入った日、恐ろしさに涙しただろう姿が目浮かぶ。

やがて少し落ち着きを取り戻すと、愛用のパイプを取り出し、無言で視線を宙にさまよわせ、ゆっくりとそれを吸ったに違いない。

その光景を想像してみる。おれに理解できたところでは、それはある年の1月6日だったはずだ。

彼の前には、さまざまな学説の書物が、蓋の開いた大きな暖炉の炎の揺らめきで薔薇色に照り映えている。偉大な物言わぬ友人たちがみなそこにいる。探求心に満ちた優れた精神をさらに豊かにしてやろうと身構えて。

[.....]

古ドゥースダムによる数枚の文書をお読みになったところで、たぶんこの闇の中にいくらか光が差したことだろう。ここでジャン＝ジャック・グランシールの手記の続きに移ろう。(p.139-140)

語り手たちのアイデンティティを探っていくにあたって、まず彼らの言語に注目しておきたい。通りの名前、登場人物たちの名前、修道院の名称など基本的にはフランス語だと思われる。しかしマルベルチュイの屋敷がある街は、ベルギーの北部フラーンデレンの、とりわけ作家の故郷であるヘントを思わせるものである。日常言語としてはオランダ語を話す土地なのだ。人物名もいくつか奇妙なものが中にはある。ゼウスの属性を持つアイゼンゴット Eisengott はドイツ語的な名（「鉄の神」と訳せる）であるし、剥製師の友人というピーケンボット Piekenbot はオランダ語から来ていると思われる。このような状況がまずここがフランスではないこと、おそらくベルギーなのだろうということを示すが、結局舞台となった都市の位置は曖昧になる。

登場人物たちがフランス語を話していたことは次のエピソードからも確認できよう。館の住人たちがみな消え去ったあと、やがて不思議な意志によって館に引き戻されてきたジャン＝ジャックは、暗闇の中で鎖に繋がれて巨大な鳥に脇腹を啄まれ苦しむランベルニッスを見出す。ランベルニッスはこのとき自らの真のアイデンティティを告げるのだが、ジャン＝ジャックはそれを理解できない。（彼は死ぬまで神々の存在も自身の神性も知らないままである。）それがフランス語の発音に関わる勘違いのせいだとわかるのである。その個所を引用しておこう。

「ランベルニッス」はくは夢中で聞いた。「どうして.....」

彼はぜいぜいと激しく喘いだ。

「約束を（プロメテ）……」

「うん、うん、何でも……」

彼はガラスのような眼を見開いてほくに微笑みかけた。

「いや…… ということじゃない…… 光を！ ああ、神のお辞儀を！」

彼は仰向けに倒れ、眼を閉じた。脇腹がぴくぴく動いていた。

[……]

怪物が獲物に襲い掛かり、肉を引き裂く音が聞こえた。

「約束を（プロメテ）！」

か細い、おぼろげな声が、ほくの耳元でそうさやいていた。(pp.166-167)

ランペルニスは《Prometée》と口にした。フランス語で「プロメテウス」である。それをジャン＝ジャックはまったく同じ発音の《Promettez》（約束してください）として聞き取ったのである。フラーンデレンらしき都市を物語世界としつつ、登場人物たち、さらにはこの街の人々もどうやらフランス語で話し、また手記のすべてもフランス語で書かれている。そのことについては何の説明も疑問も示されない。それは、ベルギーという多言語世界においてありうるかもしれない世界、しかし非現実的な「どこにもない」世界が舞台であることを示唆する、むしろ意図的な設定とも言えそうである。

II 〈語り手〉たちの宗教的アイデンティティ

次に、宗教的側面に目を向けてみたい。ベルギー、とりわけ北部フラーンデレンは敬虔なカトリック信仰地域であり、中世以来各地で特色ある宗教行事が行われてきている。それは民衆の風俗習慣や労働とも深く結びつき、土地の魂とも言えるものだろう。『マルペチュイ』の「語り手」は考えてみると3人までがカトリック神父であり、テキスト内では季節ごとの宗教行事への言及が確

かに散見できる。むしろ宗教的行事のある節目ごとに大きな事件が起こっていると言ってもいいだろう。ここでは、それぞれの〈語り手〉の言説ごとに、宗教すなわちカトリックとの関りから、彼らのアイデンティティを探ってみたい。

ジャン＝ジャックは姉のナンシーと共に、祖父アンセルム・グランシールとオリュンポスの女神との間にできたニコラ・グランシール船長の子供たちであるが、ジャン＝ジャック自身は自らの神性を知らないまま死に至る。遠方にいる父の代わりに、新ドゥースダム神父と敬虔なカトリック信者である乳母のエロディーに守られて育った彼の信仰心は、しかしかなり曖昧である。例えばエロディーが祈祷書を手にして祈りをささげる時、「ぼくは聖ヴェネランド様に謹んで何を捧げていたのか。いつも敬虔な祈りの終わるずっと前に台所を出て、いとこのフィラレートのところへ逃げ込んでいた」(p.73)。新ドゥースダム神父と聖書の解釈やマルベルチュイの謎について議論すると、しばしば意見が対立してたしなめられる場面がある。ジャン＝ジャックの行動起点であり拠り所となるのは、無自覚なままにせよ、屋敷の玄関ホールにある古代ギリシャ神テルミヌスの像のようである。それはかつて土地の境界を定める神であったが、ここではキリスト教世界と古代世界の境界石であり双方を繋ぐ入口であり、ジャン＝ジャックのアイデンティティの多層性、曖昧さの象徴でもあったと考えられるのではない。

次に、3人の神父たちに注目したい。古ドゥースダム神父は聖職者でありながら、3人の中で最も異端であり、異教の神々の存在を否定しなかった。それどころか、神々を支配しようとさえした。アッティカに赴き「恐ろしい呪文」で瀕死のギリシャの神々を捕獲しマルベルチュイ館に連れ帰ったのである。そして依頼主のカッサーヴから莫大な報酬を受け取り遠い地の果てへと旅立った。その孫にあたる新ドゥースダム神父（祖父と区別するために、テキスト中では「古 vieil」/「新 jeune」を名前の後ろに付けて区別している）は祖父の罪を贖うために聖燭祭（2月2日）の夜に狼男に変身してしまう。これは民間

に伝わる迷信めいたもの、異端的なものであるが、狼男はまたキリスト教における悪魔ともみなされていた。ジャン＝ジャックを守るべき誠実な聖職者として苦しみ続け、実際に聖燭祭の夜に狼男に変身した彼は狼の皮を焼かれて瀕死状態となる。そして最期にウシェール神父に告白して、自分の隠された姿を次のように明らかにするのである。

「院長どの」私[ウシェール神父]が枕元に座るや、彼は言った。「わたしは冒涇者の孫なのです。それで今夜の恐ろしい出来事の説明になるでしょうか？」

「兄弟よ」私は答えた。教会の良識からかけ離れた問題にかなり困惑していた。「あなたは迷信にとらわれているのではないですか」

「……迷信というのはこの世のあらゆる宗教の私生児です」とドゥースダムはやや皮肉を込めて言い返した。「権威あるいくつかの著書から引用してみせられますが、司祭が生ませた子供たちは、六代あとまで聖燭祭の夜に狼の姿になると言われています。この呪いはもっと早くに消えると言う者もいますが、わたしに残された時間を、様々な見解の検討で無駄に使うことはできません。

わたしの祖父ドゥースダムは司祭に任命されましたが——どうか天がわたし同様彼をも憐れみくださいますよう——、主にふさわしくないしもべでした。しかしわたしが恐ろしい事実を知ったのは長じてから遠い土地においてでした。そこでは贖い主イエスの栄光のために、異教徒たちの哀れな魂をつかもうと努めていました」(p.194)

聖燭祭の夜にまつわる「伝説」は、ドゥースダム神父の告白の前に、第9章のエピグラフでその意味するところが示唆されている。「聖燭祭では、光の敵である悪魔が、最も恐ろしい罫をしかける」(p.176)そしてこの一文の出典は

フラーンデレン地方の民話だという。

ここで3人目の神父である、パール・ブラン修道院長ウシェール神父に焦点を移そう。彼はある村の、修道士が大勢いるかなり大きな修道院の院長なのだが、村の場所は特定できない。人々の名前や食へのこだわり、森の存在などから、ベルギーであれば南のワロニー地方のイメージがあるが、前述のエピグラフとのつながりを考えればフラーンデレン地方と見做せる。ワロニーとフラーンデレンという二つの場所の多層性、あるいは抽象性がここにもみられる。館から逃れこの村に連れられてきたジャン＝ジャック、それを追ってきた新ドゥースダム神父、そしてアイゼンゴット（ゼウス）も、最終的にみながこの修道院に集結する。すべての手記がこの修道院に残されることになるのも、そのためだったのだ。

ウシェール神父はカトリックの聖職者としての役割を最も忠実に果たす人物である。そして、土地に根付いた宗教行事を忠実に行っていく。彼の残す手記には、そのような行事の様子が詳細に語られている。聖燭祭については彼自身がドゥースダム神父に話した言葉をそのまま次のように書き留めている。

「みなこの日に、九日間祈禱を始めます。それが大変恩恵のあるものなのはご存じですね。村では聖別された大蠟燭を灯し、ワッフルやクレープやタルトを作り、それが少し修道院にも届けられます。輪差で捕まえた野兎がシチューにされますし、たくさんの不運な飼い兎も鍋の中で息を引き取りますな。もちろん若鶏や鴨も。

この祭りにはいつもちょっぴり異教的な楽しさを感じますなあ、光の祭りというものはね？」(p.183)

しかしここでも、神父同士の会話であるにもかかわらず、異端的な要素が入り込んでいるのは興味深い。しかもそれを「楽しい」と吐露しているのである。

ウシェール神父は異教の神に取り憑かれたジャン＝ジャックを受け入れ、悪魔に憑かれて狼男に変身するドゥースダ神父をも受け入れて救済し、最後にはゼウスと対峙し「オリュンポスの最後の悲劇の最終幕に立ち会うという恐るべき特権」(p.223) も与えられた。またのちに手記を整理してから修道院を尋ねた「おれ」が得た情報は次のようなものだった。「彼は紙と軽い木材で奇妙な小さな家をいくつも作り、それをマルペルチュイと呼んでいた。次にはそれらを焚書の聖なる炎に投じ、自らをモイラと神々の手先だと主張していた」(p.223)。穢れなき篤信者たらんとした彼にも、異教的な原始の神々の存在への容認あるいは憧憬さえあったのではないかと思わせる姿である。

他にもカトリックの祝祭は物語時間の進行を示す目印のように、ときには暗示的に記述されるが、いずれの時にも何か事件が起こるか異教的なものが侵入していた。マルペルチュイでの生活の主な季節は秋から冬のようなのだが、アリスとディドロー叔父との屋敷の外での逢引を知ったジャン＝ジャックが後をつけていく夜は「何かの祭りで街はまだにぎわっていた」(p.109)。街中に提灯が灯され人々は仮面をつけている。おそらくこの祭りは11月1日の諸聖人の日であろう。現在でもベルギーではこの日、人々は仮装し夜会を催すのだ。この夜、逢引の部屋で、復讐の女神アレクトと化したアリス（と思われる）が人間ディドローを惨殺することになるのである。

12月のクリスマスは、屋敷の敷地内にあるかつての修道院跡からバルビュスカン修道士たちの霊が蘇り、マルペルチュイにいる古代ギリシャの神々を追放すべく闘いを繰り広げることになる。1月6日の公現祭は、「おれ」の想像の中でのことだが、祖父の書き残した神々の捕囚に関する恐ろしい文書が新ドゥースダム神父の手に渡って戦慄した日、と特定される。神父にとっては、マルペルチュイの恐ろしい秘密を暴くことで神に少しでも奉仕したいと決心をする日となる。そして前述した2月6日の聖燭祭には、光の敵である悪魔が闘いをいどみ、罪を負う者たちは狼男になるのである。もう一つ、ジャン＝ジャックの

死後のウシェール神父の手記として、〈3月15日〉と題する章が設けられる。ゼウス（アイゼンゴット）が修道院に姿を現し、復讐の3女神とゴルゴーンの闘いが繰り広げられ、そして後者を見つめてしまったジャン＝ジャックが石化するという場面が展開するが、テキスト上で日付への言及は一切ない。章タイトルのフランス語は〈Ides de mars〉でこれはローマのカレンダーで3月15日であり軍神マルス Mars の祝日とされる。またカエサルが殺された日でもあるという。闘い、そして英雄の死という2つの意味が込められていると思われるが、ここにもキリスト教とは異質なものが介入していると言えよう。

さて、最後の語り手としての「おれ」はどのような人物だろうか。名前は不明なのでここでも「おれ」と呼んでおく。冒頭で「おれ」は、ペール・プラン修道院で羊皮紙写本やインクナブラ〔木版活字本〕、交唱聖歌集などは盗んだが、「信心深くはないが無信仰ではない」（p.13）ので、聖体容器や聖体顕示台など金銀の祭具には手を触れなかったと言う。また最後には、これらの盗品を買い戻して修道士たちに「その財産を返して、お祈りをしてもらおう」（p.231）と語っていることから、一応はカトリック教徒だと思われる。ところでこの修道院からも一つ盗んだのが錫の箱で、その中に入っていた殴り書きや細かいメモなどの手記を分類・整理して並べ、テキスト全体を作成したのがこの「おれ」だ、という設定である。各章のタイトルも、序章に関する言及から考えて、おそらく彼の手になるだろう。

それでは各章の初めに書き込まれているエピグラフは何だろうか。意味ありげな文章は、実は各章の内容と関わっており、それを予告するとともに、謎に満ちたこの物語の真意を明かす鍵にもなっている。ただそのこともやっと読後に気づくであろう。「おれ」は盗みを生業としてはいるが、かつて高等師範学校で文献学の優秀な成績を収めたという知識人でもある。しかし古今東西の書物の引用によるエピグラフは、もはや語り手としての「おれ」の審級を超えて、作者つまりジャン・レーの意図や思想の顕れと見做すのが自然ではないか。し

かも作家自身、ヘントの高等師範学校に籍を置いていたこと（ただし成績不振で中退）、市の職員になるが横領罪で3年間監獄にいたことなどを鑑みれば、「おれ」のアイデンティティは作家とかなり重っている。

エピグラフの多くは、異教の神々の存在や民間信仰・迷信などが過去の偉大な芸術家や思想家たちによっても記されていたことを示す。それは『マルベルチュイ』で語られる不可思議な出来事がまったく荒唐無稽ではなく、知識に裏付けられたものだと言いたいかのようなのである。またそれらの説を作家自身も決して拒否しようとはしていないと捉えられるのである。

例えば、第2章のエピグラフ（p.21）には3つの引用文がある。まず一つ目の「夜の精が狐の頭を持ち去り、自分の家に掲げて崇拝した。（『フセインの物語』）」はこの章でジャン＝ジャックとドゥースダム神父とのやり取りで明かされることになる〈マルベルチュイ〉の意味と関連する。つまり、12世紀後半にフランスでまとめられた『狐物語』において、主人公の悪賢い狐ルナルの住処の名称が「マルベルチュイ（正確にはモーベルチュイ Maupertuis）城」だったこと、それはまた「悪の巣窟」という意味でもあり邪悪な者の住処、要するに悪魔と関係するものだというものである。エピグラフの2つ目の文章は「太陽を！ わたしに太陽をください！（イブセン『幽霊』）」で、これはイブセンの戯曲の中で主人公が叫ぶ言葉だが、マルベルチュイにあってはランペルニッスがランプの「光」を消して回る謎の闇の手と必死に闘い、光と色を守ろうとする姿につながるだろう。

3つ目は「家の守り神や、ブラウニー[スコットランドの夜中に家事をしてくれる小妖精]や、グラスメンヒェンといった小さな神々は、靈魂などではなく、ごく小さな化身たちだ。つまり、完全に物質的なものたちで、住みついている大地からその力を得ている。（ワース『比較民俗学』）」というもので、これはマルベルチュイの屋根裏に住みつく、人間の形をしたネズミほどの大きさの奇妙な生き物の正体を解くヒントとなろう。古代の神々か、あるいはキリ

スト教における悪魔か、何と関係するのかはテキスト内ではわからないまだが、少なくともランペルニッスが守ろうとするランプの光を消して回る「闇」の側の異形たちだということが、第3章の次のようなランペルニッスの言葉で示される。

「[.....]《あの方》は忘れてしまっているのに、ランプを消すのがやつらだったら？ おれはやつらなら知っている。自分たちが小さいのが我慢ならなくて、大きいもののふりをするのだ。しかし奴らは運命に関わる役割を与えられていない。なんの任務も割り当てられなかったんだ。だから、つまらんネズミ捕りで捕まえられもする.....」(p.77)

「[.....] 揚げ板だけは絶対に開けないように！ やつらが屋敷中に広がってしまうからな！ そうなると光は永久に消えてしまう！」(p.78)

《あの方 Lui》がいったい誰なのか、テキスト内で明かされることはないが、おそらくすべての神々、ゼウスでさえも従わざるを得ない運命の神モイラではないか。それに思い至るのは、他のすべての「謎」と同様に、テキスト最終部に至ってからである。「やつら」が人間の文明社会に対する闇の世界に属し、大地と結びついた原始的存在ではないかということも、エピグラフを手掛かりとして推察できるのである。

序章のエピグラフにも注目したい。「教会を建て、礼拝堂や十字架を道々に並べても、古代テッサリアの神々が詩人たちの歌や学者たちの書物を通して繰り返り蘇るのを阻止できない」(p.19) まだテキストのこの時点では意味不明の暗示でしかないが、第10章のエピグラフがそれと呼応し、この考え方が、テキスト全体を貫く人間と神々との関係を示しているのではと気づかせる。

人間たちの信仰から神々は生まれた.....(ヴォルテール)

一柱の神を生み出すには、女性か詩人の一つの夢で足りる。(スターン)
天幕が地面に貼られ、狩りと漁をし、矢を削り銛を研いでしまうと、彼は木の枝を一本切って神を作った。(ザベルトー『黄金時代』)(p.193)

このような「解説」的な伏線が周到に置かれたのちに、最後に新ドゥースダム神父の告白によって、それがカッサーヴの「仮説」の根拠であり、マルペルチュイにおいてその壮大な実験が行われ、悲劇へと至ったことが明らかになる。

「カッサーヴはある説を発表し、自分の恐ろしい企てにそれを利用しようと思いました。[.....]

人間は神々の気まぐれや意志から生まれたのではない。その逆で、神々が人間の信仰によって存在するのだ。この信仰が消えれば神々は死ぬ。[.....] ときに、アッティカの神々はまだ人間の心や頭から消えてはいない。伝説や書物や芸術が、幾世紀もの灰の下に埋まった火を掻き立て続けてきた。

〈オリュンポスの神々の死骸は探すな〉とカッサーヴは命じました。〈傷ついた神々を立ち上がらせろ。それをわしが何とかしてやる!〉(pp.197-198)

こうして屋敷に連れてこられた神々に人間の皮膚を与え、カッサーヴは、自らは死んで屋敷の一つの石＝心臓となってお彼らを支配しようとしたのである。本来ギリシャの神々は永遠・不死とされているがゆえにカッサーヴの説は「恐ろしい仮説」なのである。J. ヴァン・エルプは、この考え方に当時ベルギーで親しまれていたワグナー劇の影響を見ている。「ゲルマン神話は、ギリシャの不滅の神とは異なり、確かに死すべき運命の神々を想像したのだ。だが、古い貴族の館に監禁するという考えは？」⁴

ワグナー受容については、普仏戦争によりドイツ文化流入の途絶えた時期のあったフランスと異なり、ヨーロッパ全体の潮流の中で、ベルギーではすでに19世紀後半から積極的にワグナー劇をフランス語訳を含めて導入し、王立モネ劇場などで上演してきた。そのような「ゲルマン的な」要素が『マルペルチュイ』に通底する概念として取り入れられていることは注目に値する。では神々の監禁についてはどうだろうか？ ヴァン・エルプによれば、これにはジャン・レーが幼いころ大叔母から盛んに聞かされた物語からきているのではないかという。作家の現実・日常が作品にこのような形で反映されているのである。

III 作家ジャン・レーのアイデンティティの多層性

『マルペルチュイ』を対象に、別稿での物語内の異次元時空間の併存や境界の揺らぎに続いて、本稿では複数の〈語り手〉たちのアイデンティティの曖昧さを見てきた。それは、当然とも言えるが、作家自身のアイデンティティの多層性や曖昧さにもつながると考えられる。ベルギーという多層的文化の場とも関連させてそのことを確認していきたい。

1887年にヘントに生まれたジャン・レーは、子供の頃、近所に住む老女の家には足繫く通い、土地に伝わる昔話の妖精や魔法使いなどの「怖い話」を聞いていたらしい。その老女は鍛冶屋の妻で産婆もしており、ジャン・レーをとりあげた可能性もあるという。またすぐ近くには、入り口扉に死の天使や歪んだ顔など不気味なモチーフの装飾を施した大きな家もあった。それはマルペルチュイの屋敷の構えのイメージそのものだったらしい⁵。フラーンデレンの中心都市ヘントでの幼年時代に、すでにのちの創作に繋がる興味が培われていたことになる。さらに1896年、9歳の時に、父の友人の船で初めてロンドンに行き、ディケンズやコナン・ドイルなどイギリスの作家への興味が始まった⁶。また祖母については、北米インディアンの一種族であるスー族もしくはダコタ族の出であるとされる⁷。ジャン・レーの生涯については、フランス語原書・邦訳

諸作品の紹介文に、船乗りとして波乱万丈の生涯を送り、時には海賊船に乗り込み、禁酒法下のアメリカに酒の密輸をし、上陸後にはサーカスの猛獣使いなど職を転々とした、などと書かれることがあるが、おそらく出版戦略も考えた作家自身による創作だとされている。祖父と父は船に乗っていたという事実もあり、彼の作品に世界を股に掛けた冒険や航海の詳しい描写が頻出するのは親族の出自にも関係していたのだろう。

例えば短篇集『恐怖の輪』（1943）の序章は、作家自身と重なる「私」がこう語り始める。

私の幼い娘リュリュは、更けゆく夜のような黒い目をしていて、その滑らかな髪は夜空の闇のようだ。彼女はおごそかで、とても美しい。彼女の曾祖母は、ダコタの今は消滅した部族出身の女性で、たしか若い頃の不穏な時期には、呪術師をしていたはずだ。⁸

あるいは短編「闇の路地」にも、祖母の出自への部分的な連想があるのではないか。「祖母の生い立ちははっきりしない。噂では、昔船乗りだった祖父が、アルジェリアの海賊どもの手から、彼女を救い出してきたものらしい。」⁹ 実際には祖父が、ベルギーで店員として働いていたダコタの出の女性と出会い、結婚したということらしい。

作家自身の、とりわけ幼年時代の思い出が、のちの作品に反映されるというのはよくあることだろう。特に一人称小説においてそれは顕著だが、主人公の一人称語りが多いとされる「正統派」幻想小説に属すジャン・レーの諸作品においても、それは明らかにあった。古典学を修め文学の素養もありながら前述のように3年間投獄されたという経験も、『マルペルチュイ』全体を仕切る語り手の「おれ」が、盗みを生業としながら文献学の知識を駆使して古文書を整理し執筆を行うという奇妙な設定に、しっかりと反映されているのである。ま

た『マルペルチュイ』で写實的に描かれた屋敷の内外や街の様子も、ジャン・レーが生涯とどまったヘントという現実の街と重なるものである。ただそれは幼い頃の、失われた記憶の中の、理想化された「過去のフラーンデレン」であることには注意したい。彼の作品の多くが、題材も文体も「19世紀的」だと感じられるゆえんでもあろう。それは19世紀末、ベルギーのフランス語文学が中心地パリとの差異化を図り、独自の傾向で優れた作品を創出して自立し、最も「ベルギーらしさ」を発揮して一世を風靡した「ベルギー象徴派」とも通底する。例えばローデンバックの『死都ブリュージュ』に描かれた街の雰囲気や文体との類似が認められないだろうか。いわば忘れ去られた過去の街の光景を「いま・ここ」にある現実の後ろに見透かして舞台装置とし、そこに幼いころに聞いた不思議な話、怖い話から培われた、身近に並存する異次元世界、過去の別の時間を、自身の幻想小説に仕立て上げていったのである。

このような「先祖返り」的な傾向が受け入れられたのには、第二次世界大戦の占領下という状況も、実は重要な要因だったようだ。20世紀に入ると、オランダ語公用語化という制度的変化もあって、ベルギーのフランス語文学は隣の大國フランスの一部として「フランス文学」に同化する動きが強くなっていた。文学史においては、「ベルギーにおけるフランス文学」として、中心地パリに対する遠心性 phase centrifuge の時代になり、ほぼ1970年代までその傾向は続く。しかしそのような文学史的時代区分の中にあった、『マルペルチュイ』はじめジャン・レーの主要作品（集）出版が集中する1940年代は、ベルギーはドイツの占領下でありフランスとの国境も閉鎖されていた時期だった。ベルギーのフランス語文学は、作家として認知されるためにパリ在住、パリでの出版を重視するのだが（現在もそうである）、大戦中のこの時期には、必要に迫られて幻想文学作家たちが集まり、ブリュッセルに〈作家連合 Les Auteurs Associés〉社を設立して、ここから出版した。それが「ベルギー文学」の自立を事実化することになり、ジャン・レーの作品はその時宜に見事にかかったの

である。ジャン・レーが戦後には次第に忘れられていくのは、ベルギーのフランス語文学が再びパリを向き「フランス文学」との一体化を目指すようになる傾向と無関係ではないだろう。

しかしやがてまた、1961年のブリュッセルのマラブー Marabout 社からの幻想小説主要作品復刊をきっかけに、「正統派」ベルギー幻想文学の最も重要な作家としてジャン・レーが取り上げられ、「ベルギー幻想派 L'école belge de l'étrange」として脚光を浴びることになる。フランス語文学史的には、この頃から改めて「ベルギー文学」の意味を問い直し、そのアイデンティティを探ろうとして《ベルジチュード belgitude》という概念も提唱される時期になっていく。作家の死後になるが1972年には〈ジャン・レー文学賞〉が創設され、マラブー社の幻想小説シリーズとともにベルギーにおけるこのジャンルが明確に「視覚化」されたと言えよう。

第二次大戦のさなかに執筆・出版された『マルベルチュイ』に、当時の社会状況すなわち戦争の影響が全く見られないことも特徴として指摘しておくべきだろう。読者に過酷な現実から一時でも離れてもらいたいという出版社としての意向もあったらしいが、目の前の現実とはいっさいかわりのない、想い出の中の理想化された街の「日常」と、古代ギリシャ神話や中世といった「異次元世界」とのパラレルワールドに巻き込んでいく世界観、それもまた人々に受け入れられた理由の一つだろう。J.デュアメルは、このように古代の神々の捕囚という大テーマに、さらに中世の修道士たちの時を超えた出現、狼男という迷信めいたものの挿入といった「副次的要素」が入り込んでいることは、いわば超自然的なものの「囿」や「痕跡」としての意味を持ち、それらが「幻想的なもの」を指し示す役割も果たしていると指摘しているが¹⁰、カーニバル的にも形容したくなるほど数多くの多彩な異次元時空間が併存する『マルベルチュイ』は、我々を徹底的に「別の現実」あるいは「現実的幻想」へといざなってくれるのである。

ジャン・レーは以上のように作品を通して異世界を創造したのだが、彼自身についても、あり得たかもしれない「別の人生」を創造しようとした。世界中の多くの読者を（出版社も）信じ込ませた波乱万丈の人生を、ヘントで執筆にいそしむ作家の人生と併存させたのである。パロニアンはそれを「空想的冒険」と呼び、「彼の成した最も素晴らしい旅は頭の中に、そして強烈なヴィジョンで溢れかえる彼の夢のただ中で展開されたのだ」¹¹と断言する。さらにこの言葉も引いておこう。「世界全体が幻想的なもの *fantastique* なのだ。世界の中のすべて、我々の 日常のすべてが[下線は原文イタリック]」¹² 作家はまた、「ジャン・レー」だけでなく、「ジョン・フランダース」はじめ無数のペンネームを使って、フランス語・オランダ語の両言語で膨大な量の作品を書いていた。オランダ語では主に青少年向けの SF や冒険小説などを書き、マンガのシナリオライターとしても知られているが、ジャン・レー自身で仏語訳したジョン・フランダース名義のオランダ語テキストが、隣国オランダで改めて「ジャン・レー」作品として、つまり別人の作品としてオランダ語に訳されて紹介されるというエピソードもあったらしい¹³。ベルギーの言語事情もさることながら、作家のアイデンティティそのものが多層的である、また現実／非現実の境界が錯綜し曖昧となる。それはまた、現在でもその在りどころが議論され続けている「ベルギー的なもの」の一側面とも言えるのではないだろうか。

注

- 1 岩本和子「ジャン・レー『マルベルチュイ』における都市と神話 ―ベルギー幻想小説とパラレルワールド―」『国際文化学研究』第56号（神戸大学大学院国際文化学研究科紀要）、2021年7月、pp. 51-86。
- 2 『マルベルチュイ』（拙訳）及び、フランス語・オランダ語の作品を集めた作品集翻訳を刊行したので、その拙訳を本稿でも使用している。『マルベルチュイ ジャン・レー／ジョン・フランダース 怪奇幻想作品集』（岩本和子・井内千紗他編訳）国書刊行会、2021年。

- 3 Jean Ray, *Malpertuis : Histoire d'une maison fantastique*, préface de John Ballister, Lecture de Joseph Duhamel, édition Labor, collection « Espace Nord », No.88, Bruxelles, 1993, p.16. 以下、本書からの引用は本文中にこの版のページ数のみを記す。
- 4 Jacques Van Herp, « Aux sources de *Malpertuis* », *Textyles 4*, « Jean Ray » Le Cri, (1-4, 1997), p.218.
- 5 *Littératures fantastiques : Belgique, terre de l'étrange, Tome III : 1914-1945*, Contes réunis et présentés par Éric Lysøe, <Espace Nord>, 2005, p.107.
- 6 Anchal Verma, *Littérature fantastique belge et belgitude : études des nouvelles fantastiques de Jean Ray*, 2019, p.26.
- 7 *Littératures fantastiques*, *op.cit.*, p.108.
- 8 Jean Ray, « *Les Cercles de l'épouvante* » in *Le Grand Nocturne, Les Cercles de l'épouvante, nouvelles*, Préface de Jean-Pierre Bours, lecture de Jacques Carion, <Espace Nord>, Actes Sud / Labor, Bruxelles, 1984, p.193.
- 9 Jean Ray, « La Ruelle ténébreuse » (1931), in *Le Grand Nocturne, Les Cercles de l'épouvante, nouvelles*, *op.cit.*, p.107.
- 10 Joseph Duhamel, « Préface », in Jean Ray, *Malpertuis : Histoire d'une maison fantastique*, *op.cit.*, p.246.
- 11 Jean-Baptiste Baronian, *La Littérature fantastique belge : une affaire d'insurgés*, Académie de Belgique, Collection l'Académie en poche, 2014, p.45.
- 12 *Ibid.*, p.46.
- 13 ジョン・フランダース (=ジャン・レー) のオランダ語作品翻訳を担当された井内千紗氏のご教示による。

(いわもと・かずこ フランス語圏文学・芸術文化論)